

耐震性防火水槽設置に伴う

友井東遺跡第6次・コモ田遺跡第5次
発掘調査概要

2007年3月

東大阪市教育委員会

1 友井東遺跡第6次発掘調査



第1図 調査地位置図

の提出をうけ、防火水槽設置箇所を対象に、事前の発掘調査を実施することとなった。調査は東大阪市教育委員会文化財課の担当で、平成18年1月12日から1月24日まで実施した。調査面積は36m²である。

2) 友井東遺跡の既往の調査

友井東遺跡は、昭和38年（1963）金物団地建設に伴う浄水場掘削工事に際して、その排土中に後期弥生土器、古墳時代中期～後期の土師器、須恵器が出土したことにより周知されるようになった。その後、友井東遺跡内で、近畿自動車道建設工事に伴う発掘調査が財団法人大阪府文化財センターによって実施されたが、それ以外の調査は近年まで見られなかった。これは、遺跡発見時の工事により、そのまま広範囲に遺跡が滅失したことによるものと考えられる。団地内の事業所の建替工事に伴い試掘確認調査をたびたび実施してきたが、前記の事由により良好な状態で遺構や遺物包含層が発見されることがなかった。ところが、平成14年5月に埋蔵文化財の状況把握に伴い小規模な調査を実施したところ、庄内式期後半のビットが検出され、遺構を覆う遺物包含層から、庄内式期後半から布留式期の土師器、7世紀の須恵器が出土した（第5次調査）。これらの調査成果から、周辺には該期の遺構面が広がっていることが予想された。なお、今回の調査地は第5次調査地の南100mの地点にあたり、遺跡発見の契機となった浄水場推定地の近辺に位置する。

1) はじめに

友井東遺跡は、東大阪市金物町・友井5丁目に広がる弥生時代から古墳時代に至る集落遺跡である。東大阪市の南東隅に位置し、遺跡の東側と南側は八尾市に隣接している。遺跡の範囲は東西、南北とも約350mの規模と推定されている。旧大和川ないしその先行河川が形成する自然堤防上や微高地に立地すると考えられ、現在の標高で約5m前後を測る。

平成17年7月、東大阪市金物町5番地の金物町公園において、地下式耐震性防火水槽設置工事が計画された。計画地は周知の友井東遺跡に該当することから、まず調査依頼に基づき平成17年9月9日に確認調査を実施した。調査の結果、GL-2.0mで古墳時代中期～後期の遺物包含層、またその下面から溝状遺構が検出された。このため、「埋蔵文化財発掘の通知」

3) 調査の概要

調査は、確認調査の結果に基づき、G L - 1.9mまでを重機で掘削した。以下 0.4mを人手で掘削し、遺構、遺物の検出を図った。確認した層位は次のとおりである。

第0層 盛土層。現代。層厚1.1~1.4m。

第1層 5Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂。細粒砂のブロックを含む。旧耕土層である。

第2層 10Y4/1灰色シルト～細粒砂。細粒砂のブロックを含む。

第3層 7.5GY5/1緑灰色シルト～細粒砂。粗粒砂を含む。底面に灰色砂のラミナが見られる。

第4層 10GY5/1緑灰色シルト～細粒砂。鉄分を含む。

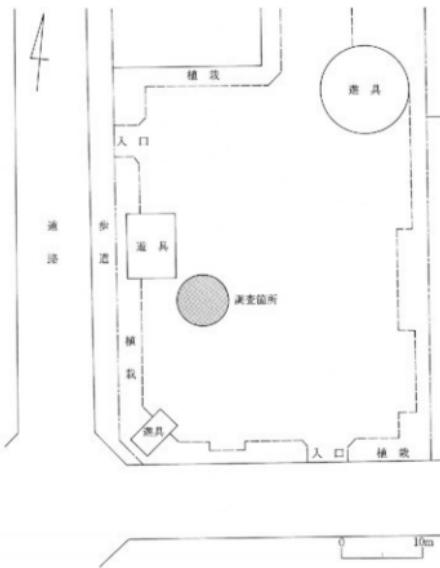
第5層 10GY5/1緑灰色粘質シルト。鉄分を含む。

第6層 2.5Y5/1黄灰色シルト～細粒砂。鉄分・マンガン粒を含む。中粒砂を含む。第4層から第6層まで鉄分・マンガン粒を含むことから耕土層と考えられ、遺物を含まないことがから時期の詳細は不明であるが、下層の遺物包含の状況から近世期以降の堆積層と推定される。また当該期には調査地周辺は耕作地であったことがわかる。

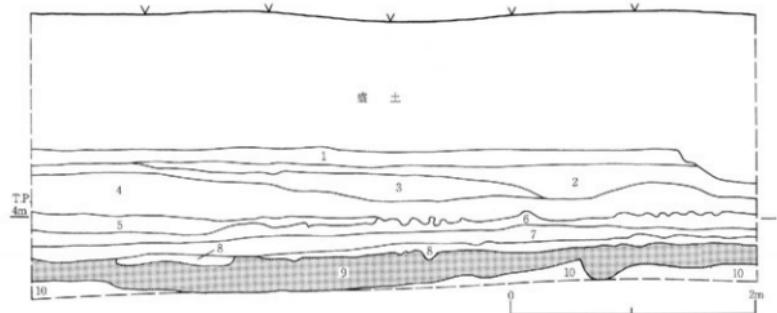
第7層 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト～中粒砂。上部はやや細粒砂の様相を帯びる。鉄分・マンガン粒を含み縮まる。弥生土器と須恵器が出土した。

第8層 5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂。弥生土器と須恵器が出土した。

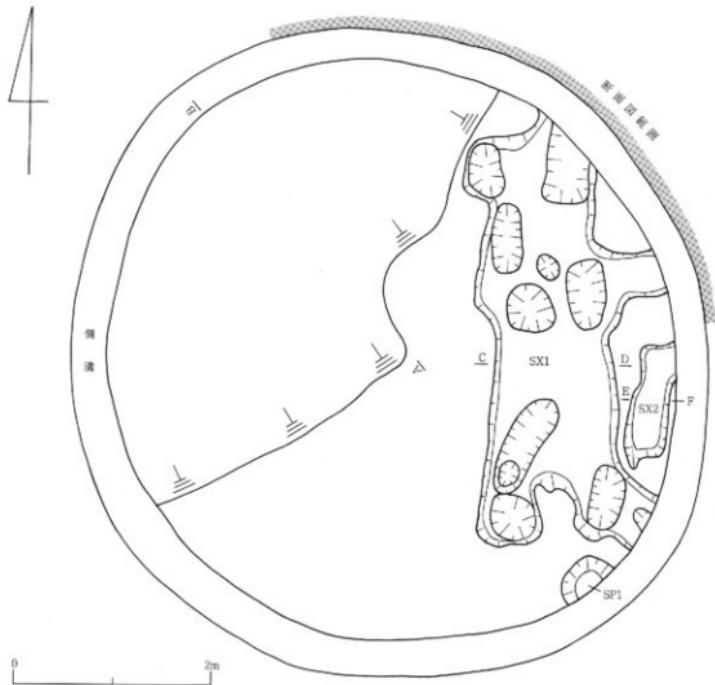
第9層 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト～極細粒砂。弥生土器・須恵器・土師器が出土した。下部には、



第2図 調査ピット位置図



第3図 調査地北東断面図



第4図 第10層上面検出遺構平面図（A～Fの記号は、第5図と対応）
10YR4/1褐色灰色粘質シルトが見られた。これを第9'層とした。

第10層 5B5/1褐色灰色極細粒砂～シルト。今回の調査地でベースとなる層である。

まず、第9層上面で第8層を埋土とする足跡を検出した。第10層上面のレベルは調査地南東側で高く、北西側で低い。南東側で微高地状の平面を形成する箇所では、傾斜面を検出した。南東側から北西側にかけて緩やかに落ち込むが、人為的なものではなく自然作用によるものと考えられる。落ち込みは第9'層を堆積層とし、断面の観察によりさらに5層に区分できた（第5図）。第9'層の細分は以下のとおりである。

第9'-1層 2.5Y4/1黄灰色シルト～中粒砂で2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルトのブロック土が混じる。マンガン粒を含む。

第9'-2層 5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂。

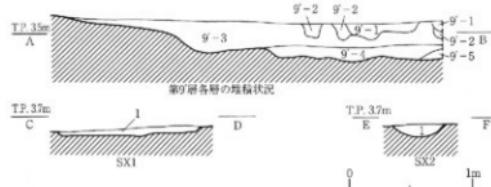
第9'-3層 2.5Y4/1黄灰色粘土質のシルト～極細粒砂。マンガン粒を含む。

第9'-4層 10YR4/1褐色粘土質シルト。

第9'-5層 5Y5/2灰オリーブ色シルト～極細粒砂。

第10層上面で不定形な落ち込み状遺構を2箇所とピット1個を検出した。いずれも調査ピットの東側で微高地を呈する箇所から発見されたものである。SX1は不定方形を呈する土坑を本体とし、北・

東・南の3箇所に溝が接続する形態をもつ。土坑部は断面浅い皿状を呈する。土坑部は現存長で南北4.55m、東西1.53m、深さ0.12mを測る。溝状部は幅が北側0.82m、東側0.47m、南側0.58mで深さは各々0.11~0.24mを測る。埋土はN4/灰色粘土質シルトに第10層が



第5図 傾斜面・各遺構断面図

ドット状に混入する層であった。SX1の内部には径0.4~0.5mの規模を持つピット状の落ちが8箇所認められた。SX2は小規模な溝状を呈する落ち込みで、南北1.17m、東西0.42m、深さ0.1mを測る。検出面の状態からSX1とは別個の遺構と捉えたが、溝状部の形態が類似することから、SX1の一部とも考えられる。埋土はSX1と同様である。SP1は円形と推定されるピットで径0.62m、深さ0.13mを測る。埋土はSX1と同様である。SX2で述べた事由によりSX1の一部と捉えることができる。これらの遺構はその形状から、集落など居住に供する遺構とは考えられず、耕作などの用途のため築かれたものと推定される。いずれも出土土器の年代観から古墳時代後期に属する。

4) 出土遺物

弥生~古墳時代の遺物が遺構及び遺物包含層より出土した。弥生時代の土器は後期のものである。古墳時代の土器で文末に時期を記していないものは5世紀末~6世紀前半のものである。

傾斜面・遺構出土土器

傾斜面（第6図 1~12）

弥生土器・土師器・須恵器がある。

弥生土器は甕と底部の器種がある。

1は甕である。口縁部が長く外反し、口縁端部は丸く終る。頸部内面には稜が付く。外面に接合痕を残す。外面はヨコナデ調整する。生駒西麓産である。

4は底部である。平底を呈するが中央はやや凹む。外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。非河内産である。

2・3は土師器の甕である。2は体部が内傾し、口縁部はやや面を持つ。風化が著しく調整法は不明である。内面は二次焼成を受け、黒く変色する。3は炊き口の側縁部である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

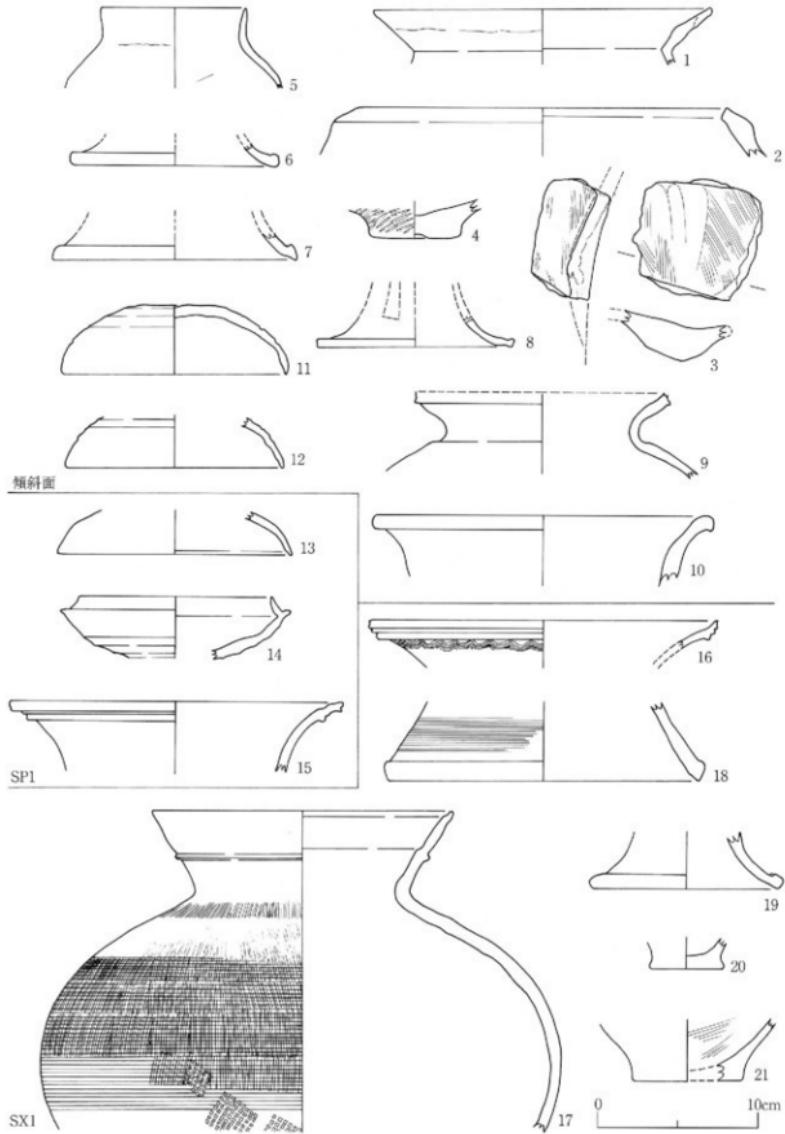
須恵器は壺・高杯・甕・蓋杯の器種がある。

5は壺である。体部の張りが大きく、口頭部は上方へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味に終る。内外面は回転ナデ調整する。

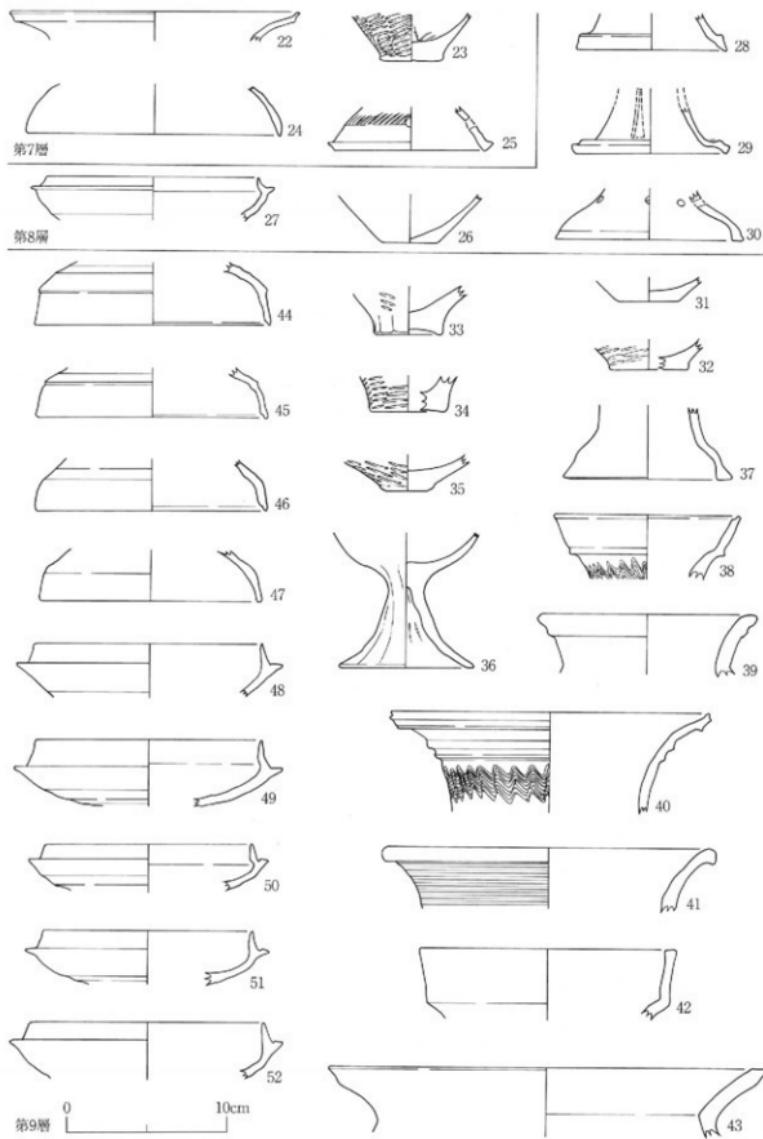
6~8は高杯の脚部である。裾部がゆるく立ち上がる。6・7は裾端部がやや上方へ肥厚する。内外面は回転ナデ調整する。8は裾端部が面を持つ。透かし孔の一部が残る。内外面は回転ナデ調整する。

9・10は甕である。9は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はナデ調整、口縁部内外面は回転ナデ調整する。10は口縁部が大きく外反し、口縁端部はやや丸く終る。外面はカキメ調整、内面は回転ナデ調整する。

11・12は蓋杯である。口縁部がやや内湾し、口縁端部は丸く終る。天井部はやや丸い。口縁部内外面は回転ナデ調整する。天井部外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整の後ナデ調整する。



第6図 出土遺物実測図（1）



第7図 出土遺物実測図 (2)

S P 1 (第6図 13~15)

須恵器は蓋杯・杯・甕の器種がある。

13は蓋杯である。口縁部がやや内湾し、口縁端部はわずかに面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

14は杯である。体部は浅い。受部が短く水平に伸び、端部は丸く終る。立ち上がり部が短く外反し、端部は丸く終る。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

15は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部直下に1条の凸帯を廻らす。内外面は回転ナデ調整する。

S X 1 (第6図 16~21)

弥生土器と須恵器がある。

20・21は弥生土器の底部である。平底を呈し、体部が外上方へ伸びる。21は内面をハケメ調整する。

20の内面と21は風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産である。

須恵器は甕・器台・高杯の器種がある。

16・17は甕である。16は口縁端部が面を持つ。口縁端部直下に2条の凸帯と1帯の櫛捲波状文を廻らす。内外面は回転ナデ調整する。17は体部が大きく張り、口縁部が直線的に外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。口縁部の中位に1条の凸帯を廻らす。体部外面はタタキの後カキメ調整、内面は回転ナデ調整する。口縁部内外面は回転ナデ調整する。

18は器台の脚部である。裾部が急に立ち上がり、裾端部はやや丸く終る。外面はカキメ調整、内面は回転ナデ調整する。

19は高杯の脚部である。裾部がゆるく立ち上がり、裾端部はやや上方へ肥厚する。内外面は回転ナデ調整する。

遺物包含層出土土器

第7層 (第7図 22~25)

弥生土器と須恵器がある。

弥生土器は甕と底部の器種がある。

22は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。所謂、受口状口縁である。風化は著しく調整法は不明である。非河内産である。

23は底部である。やや丸みを持つ平底を呈する。外面はタタキ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。非河内産である。

須恵器は蓋杯と高杯の器種がある。

24は蓋杯である。口縁部がやや内湾し、口縁端部は丸く終る。口縁部内外面は回転ナデ調整する。

25は高杯の脚部である。裾部が内湾しながら立ち上がり、裾端部は面を持つ。外面にヘラ指による列点文を廻らす。円形の透かし孔を穿つ。内外面は回転ナデ調整する。

第8層 (第7図 26~30)

弥生土器と須恵器がある。

26は弥生土器の底部である。平底を呈し、体部が外上方へ伸びる。風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産である。

須恵器は杯と高杯の器種がある。

27は杯である。体部は浅い。受部が短く水平に伸び、端部は丸く終る。立ち上がり部が短く外反し、端部は丸く終る。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

28~30は高杯の脚部である。28は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部は面を持つ。内外面は回転ナデ

調整する。29は裾部が内湾した後、急に立ち上がる。裾端部は面を持つ。台形と考えられる透かし孔を穿つ。外面は回転ナデ調整する。30は裾部が内湾しながら立ち上がり、裾端部は面を持つ。円形の透かし孔を穿つ。外面は回転ナデ調整する。

第9層（第7図 31～52）

弥生土器・須恵器・土師器がある。

31～35は弥生土器の底部である。やや上げ底を呈するものと平底を呈するものがある。外面をタタキ調整、内面をナデ調整するものが多い。35は非河内産、他は生駒西麓産である。

須恵器は高杯・甌・甕・蓋杯・杯の器種がある。

37は高杯の脚部である。裾部が内湾した後、急に立ち上がる。裾端部は面を持つ。外面は回転ナデ調整する。

38は甌である。頭部が外反した後、口縁部は直線的に外上方へ伸びる。口縁端部の内側に1条の沈線文を施す。外面は頭部と口縁部に1条の凸蒂文を廻らす。頭部に櫛描波状文を施す。外面は回転ナデ調整する。

39～41は甕である。39は口縁部がゆるく外反し、口縁端部は丸く終る。口縁端部直下にゆるい段が付く。外面は回転ナデ調整する。40は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部直下に1条、それよりやや下に2条の凸蒂文を廻らす。凸蒂文の下に櫛描波状文を施す。外面は回転ナデ調整する。41は口縁部が強く外反し、口縁端部は丸く終る。外面はカキメ調整、内面は回転ナデ調整する。

44～47は蓋杯である。44・45は口縁部と天井部の境に明瞭な稜が付く。口縁端部は面を持つ。天井部外面の上半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。46・47は口縁部がやや内湾し、口縁部と天井部の境は不明瞭でやや丸い。46は口縁端部がやや面を持ち、47は丸く終る。口縁部内外面は回転ナデ調整する。

48～52は杯である。体部は浅い。受部が短く水平に伸び、端部は丸く終る。立ち上がり部が短く外反し、端部は丸く終る。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

土師器は高杯・甌・甕の器種がある。

36は高杯である。裾部はゆるく立ち上がり、角度を変えて上方へ伸びる。裾端部は丸く終る。杯部の上方は欠損するが浅い椀状を呈すると考えられる。風化が著しく調整法は不明である。

42は甌である。頭部が外反した後、口縁部は上方へ伸びる。口縁端部は面を持つ。風化が著しく調整法は不明である。布留式期。

43は甕である。口縁部がくの字形に外反し、口縁端部は尖り気味に終る。頭部内面に稜が付く。内外面はヨコナデ調整する。

第9層上面（第8図 53～56）

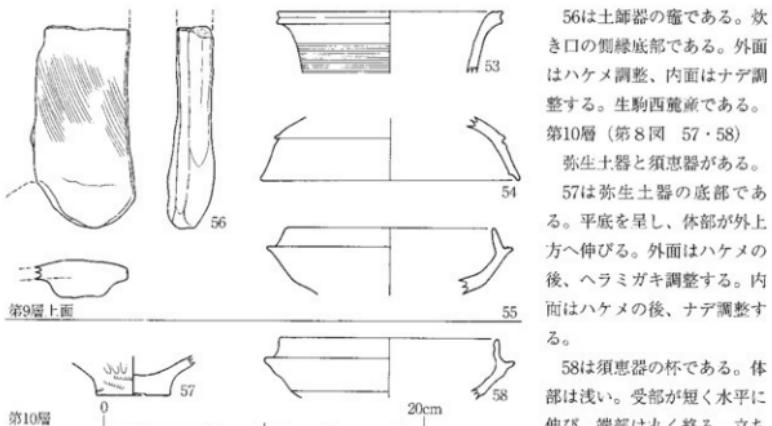
須恵器と土師器がある。

須恵器は甌・蓋杯・杯の器種がある。

53は甌である。口縁部が強く外反し、口縁端部は面を持つ。外面はカキメ調整、内面は回転ナデ調整する。

54は蓋杯である。口縁部と天井部の境に明瞭な稜が付く。口縁端部はやや面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

55は杯である。体部は浅い。受部が短く外上方へ伸び、端部は丸く終る。立ち上がり部が短く内傾し、端部は丸く終る。内外面は回転ナデ調整する。



第8図 出土遺物実測図（3）

は丸く終る。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

5) まとめ

今回の調査では、第10層上面で落ち込み状遺構2箇所とピット1個を検出した。落ち込み状遺構S X 1の内部にはピット状の凹みが9箇所にわたってみられ、その形状を併せて考えると、耕作・耕地に関連した遺構と推定される。所属時期は内部からの出土土器から古墳時代後期と考えられる。

今回の調査地から北に約100mの地点にあたる第5次調査では、遺物包含層の出土ながら、古墳時代前期の庄内式期後半から布留式期に属する土師器が中量見られることから、時期差をもって人々が移動したことが知られる。しかし、第5次調査・第6次調査とも掘立柱建物を構成するピットや土坑、溝など居住域をうかがわせる遺構は見つかっておらず、この周辺では、当該期の集落の様相は依然として不明といわざるをえない。

いっぽう、第5次・第6次調査の東に接する近畿自動車道の調査地（第3次）では古墳時代中期～後期の古墳・掘立柱建物・溝・土坑が稠密に検出されており、当該期の集落が第3次調査地を中心とした地域に広がることがわかる。

また、出土遺物には、古墳時代の須恵器に混在して、弥生時代後期の土器が見られることが注目される。先述した第3次調査でも、弥生時代中期後半～後期の井戸・溝・土坑・柱穴が検出されており、それとの関連が考えられる。友井東遺跡での今後の調査の進展が期待される。

【参考文献】

東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成14年度－』2003年。

大阪府教育委員会・財團法人大阪文化財センター『友井東（その1）』1984年。

56は土師器の底である。炊き口の側縁底部である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓庶である。

第10層（第8図 57・58）

弥生土器と須恵器がある。

57は弥生土器の底部である。平底を呈し、体部が外上方へ伸びる。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。

58は須恵器の杯である。体部は浅い。受部が短く水平に伸び、端部は丸く終る。立ち上がり部が短く外反し、端部



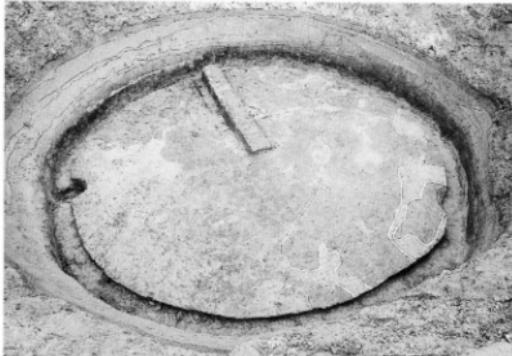
調査前の状況（南より）



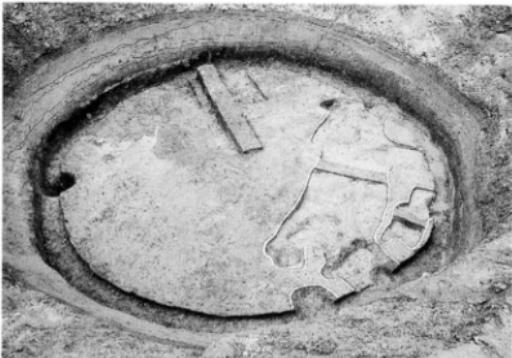
第9層上面足跡検出状況



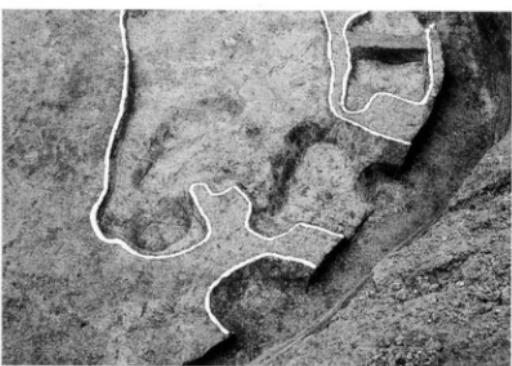
調査地断面



第10層上面遺構検出状況（南より）

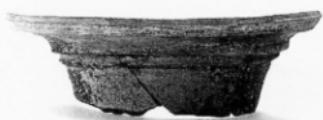


第10層上面遺構掘削後状況(南より)



S X 1 内ピット状落ち込み検出状況
(南より)

圖版3 友井東遺跡第6次調查 遺物



40



11

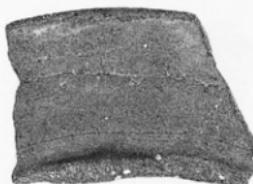


36



17

1. 傾斜面、S X 1、第9層出土須恵器蓋・壺、土師器高杯



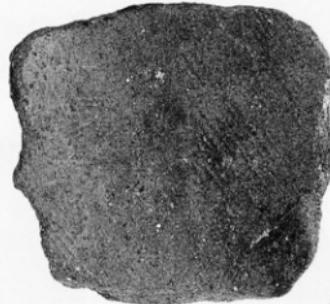
1



2

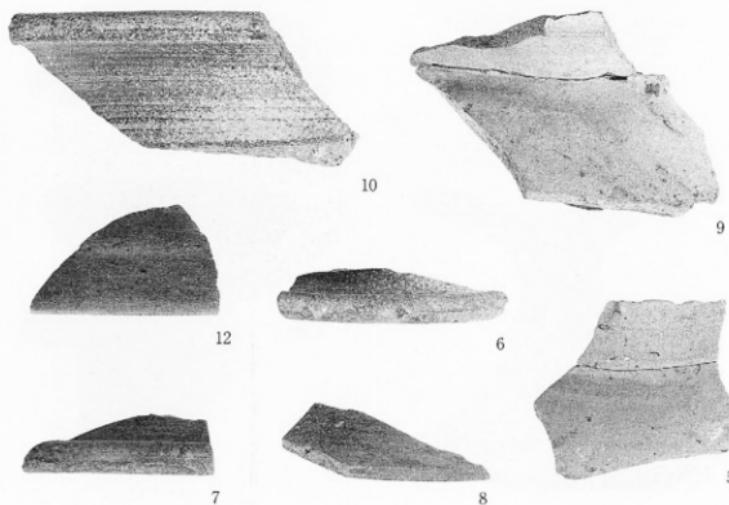


4

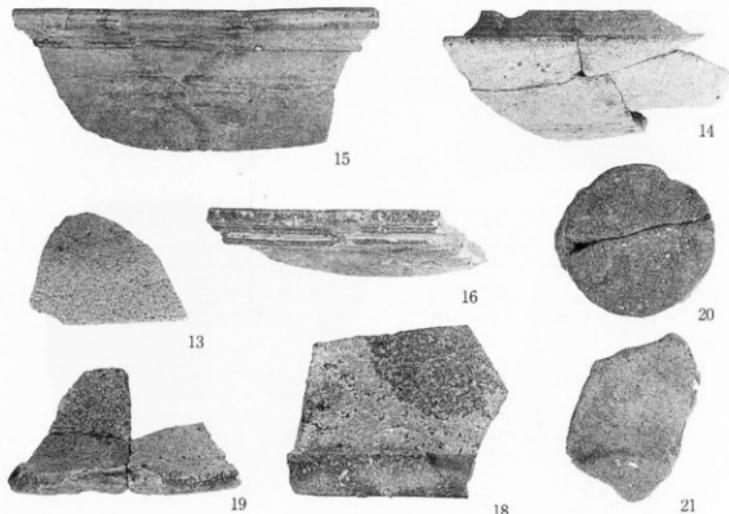


3

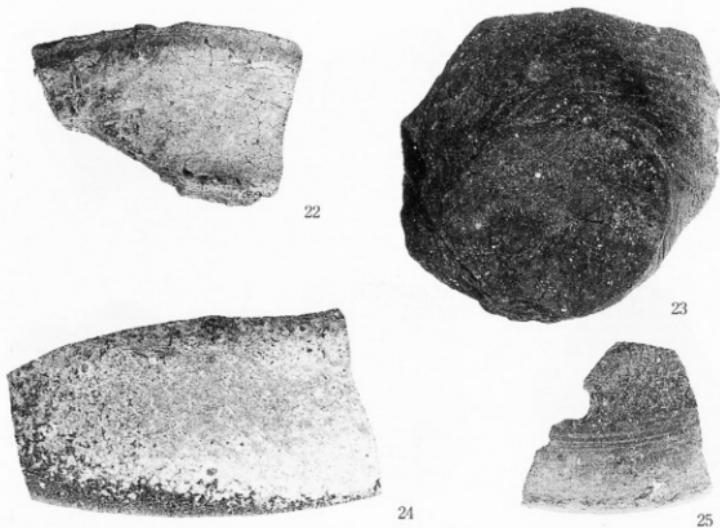
2. 傾斜面出土弥生土器壺・底部、土師器壺



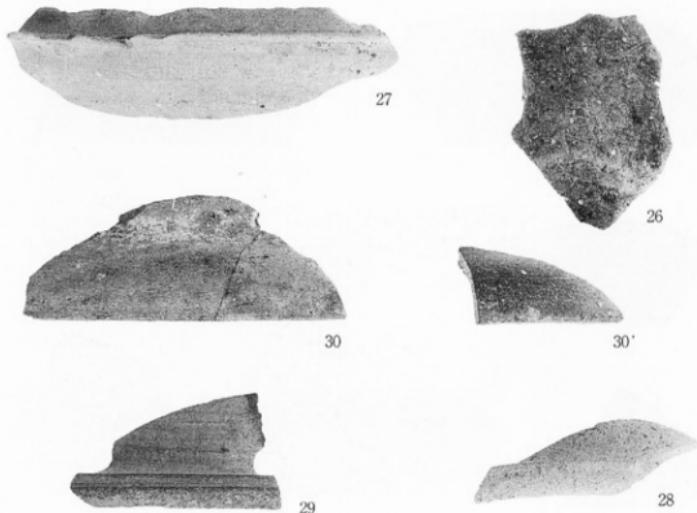
1. 傾斜面出土須恵器壺・壺・蓋杯・高杯



2. SX1、SP1出土弥生土器底部、須恵器杯・蓋杯・壺・高杯・器台

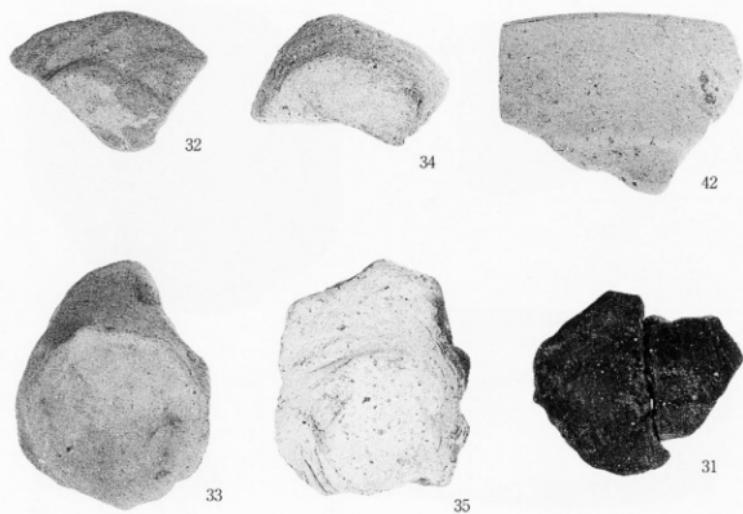


1. 第7層出土弥生土器壺・底部、須恵器蓋杯・高杯

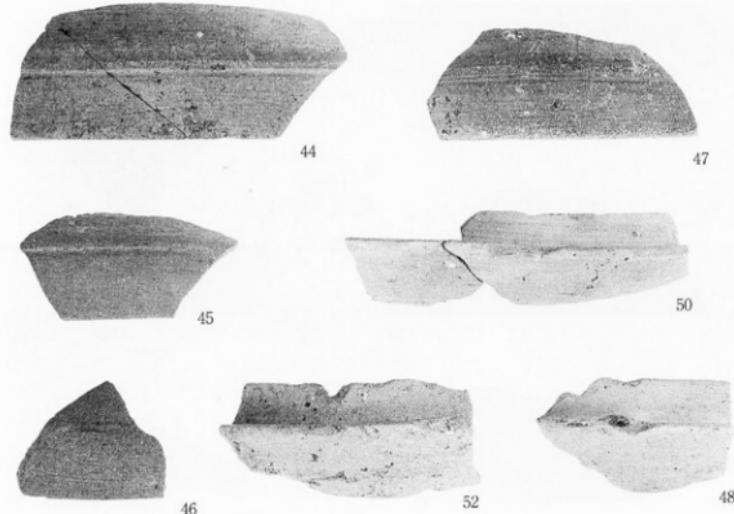


2. 第8層出土弥生土器底部、須恵器杯・高杯

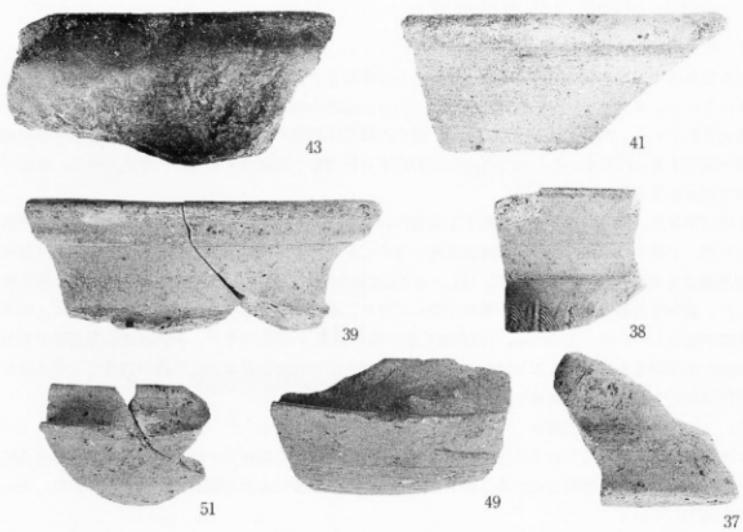
圖版 6
友井東遺跡第6次調査
遺物



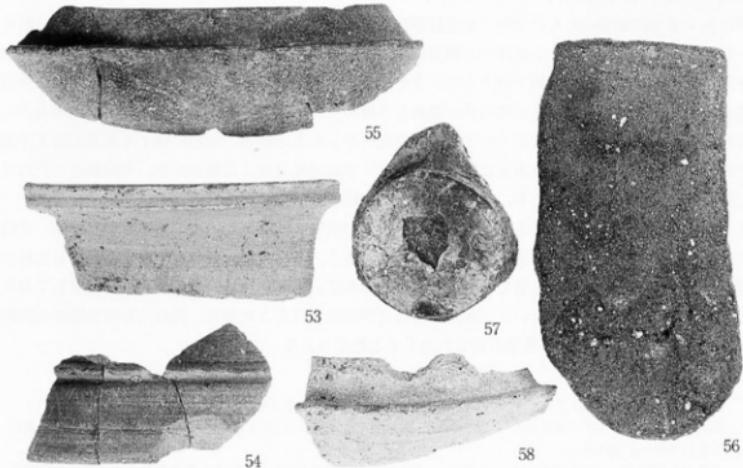
1. 第9層出土弥生土器底部、土師器壺



2. 第9層出土須恵器杯・蓋杯



1. 第9層出土土師器壺、須恵器杯・高杯・謫・甕



2. 第9層上面、第10層出土弥生土器底部、土師器壺、須恵器甕・杯・蓋杯

2 コモ田遺跡第5次発掘調査

1)はじめに

コモ田遺跡は、東大阪市下六万寺町1丁目・六万寺町2丁目に広がる古墳時代の集落遺跡として周知されている。東大阪市東部の南側に位置している。遺跡の範囲は東西約140m、南北約150mの規模と推定されている。調査次数が少ないため、遺跡の様相は不明の点が多いが、コモ田遺跡は生駒山地西麓を流下する大門川ないしその先行河川が形成する扇状地上に立地するものと考えられる。現在の標高で12m前後を測る。

平成17年9月、東大阪市下六万寺町1丁目地内の六万寺公園で地下式耐震性防火水槽設置工事が計画された。工事地は周知のコモ田遺跡に該当することから、まず調査依頼に基づき平成17年9月22日に確認調査を実施した。調査の結果、GL-0.7mで弥生時代後期～古墳時代後期の遺物包含層を検出した。遺物包含層は2層にわたって見つかっており、その上面では溝状の遺構が、下面では土坑状の遺構が遺存していた。このため、「埋蔵文化財発掘の通知」の提出をうけ、防火水槽設置箇所を対象に事前の発掘調査を実施することになった。調査は東大阪市教育委員会文化財課の担当で、平成18年1月16日から1月26日まで実施した。調査面積は20m²である。

2)コモ田遺跡の既往の調査

コモ田遺跡は、前記したように調査次数が少なく、北に位置する繩手・段上遺跡や南の馬場川遺跡と比べて遺跡の様相は不明な点が多く存する。その中でこれまで4次の調査が実施してきた。その状況を摘要していく。

(1) 第1次調査は昭和61年4月に立会調査として実施された。個人住宅建設にかかる浄化槽埋設工事に伴うもので、浄化槽(1.2m×1.8m)という限られた範囲であったが、後期の弥生土器や古墳時代後期の土師器・須恵器の出土を見た。第2次調査も浄化槽埋設工事に伴うもので平成10年4月に小規模な調査が実施され、古墳時代の遺物が出土した。

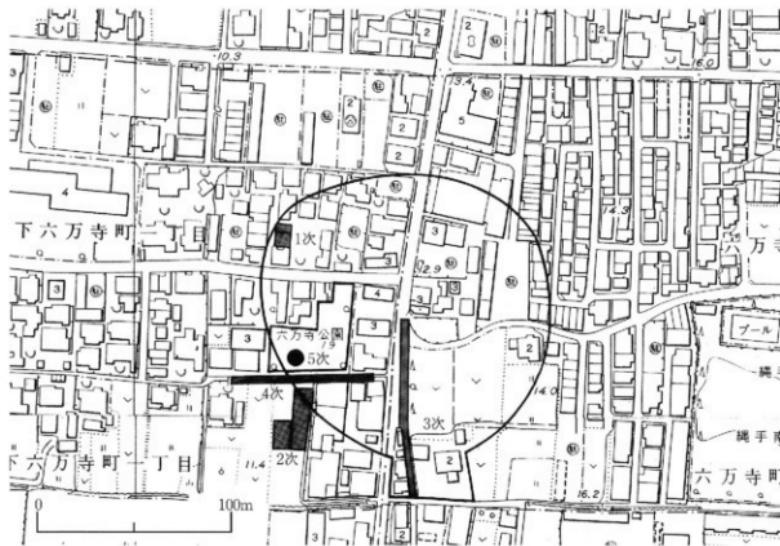
(2) 第3次・第4次調査はともに公共下水管渠築造工事に伴うものである。第3次調査は平成11年8月～11月に実施された。コモ田遺跡の南端部にあたる地点から、古墳時代の井戸が検出され、その内部から土師器甕や木製品の横植が出土した。また古墳時代前期の土師器甕・小型丸底壺・高杯、後期の弥生土器も出土した。井戸は古墳時代の遺物包含層の下面で検出されたもので、井戸検出地点から南方にかけては遺物包含層およびその下面で溝が見つかったことから、遺跡に接する東西道路まで遺跡の範囲が拡大された。第4次調査は平成14年9月～平成15年2月に実施された。今回調査した六万寺公園に接する東西道路にあたり、弥生時代後期の遺物包含層が検出されている。

これまでの調査成果を総合すると、まずコモ田遺跡の所属時期は現在のところ弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期の3時期に収斂されるようである。また現地に遺存した場合、遺物包含層や遺構面までの深さが現地表から著しく浅いのも特徴である。遺跡範囲の内部は、人家が密集しており大規模な調査は実施されていないが、井戸や溝などが散見されることから、概ね六万寺公園から旧国道170号線側にかけて小規模な集落が営まれたものと推定される。

(1) 菅原章太「コモ田遺跡の立会調査」(『東大阪市文化財協会ニュース』2巻1号、1986年。)

(2) 坂田典彦「第22章 コモ田遺跡の第3次調査」(東大阪市教育委員会『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成11年度－』2000年。)

(3) 才原金弘「第8章 コモ田遺跡の第4次調査」(東大阪市教育委員会『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成15年度－』2004年。)



第1図 調査地位置図

3) 調査の概要

調査は、確認調査の結果に基づき、表土（真砂土）、第1層～第3層まで（GL -0.7mまで）を重機を使用して掘削した。その後は0.6mの遺物包含層を人力にて掘削し、遺構・遺物の検出を図った。確認した層位は次のとおりである。

第0層 表土層。公園造成の真砂土。

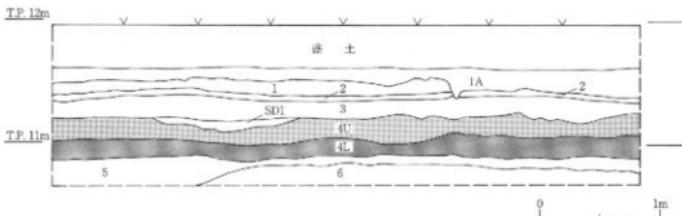
第1層 2.5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂混じりシルト。旧耕土層である。表土層と第1層の間には、第1層に近現代のレンガ片等が混じる層が介在していた。これを第1A層とした。

第2層 7.5YR4/6褐色粗粒砂混じりシルト。床土層である。

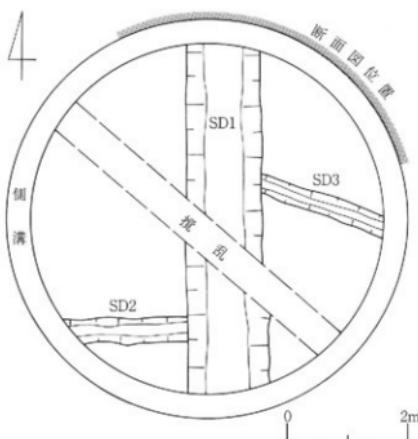
第3層 10Y4/1灰色粗粒砂混じり細粒砂。マンガン粒多く含む。遺物は出土していないが土質や含有物から見て近世以降の耕作土層と考え



第2図 調査ピット位置図



第3図 調査地北東側断面図



第4図 第4層上面検出遺構略図

ら、第5層上面が古墳時代ないし弥生時代の遺構面を形成すると考え、慎重に精査したが、調査対象箇所の範囲では遺構は認められなかった。このため第5層を慎重に掘削したところ、第5層の上部から中部にかけては無遺物であったが、下部で後期の縄文土器が少量出土した。

第6層 5B5/1青灰色粗粒砂～細礫。調査地の東側のみで検出。

前記したように、今回の調査で検出した遺構は第4U層上面で見つかった溝3条にとどまった。

S D 1 はほぼ南北に走る溝で底面のレベル差から南から北へ流下する。幅120~140cm、深さ8cmを測る。埋土は第3層を主体とし、第4 U層のブロック土が少量混じる。S D 2、S D 3はS D 1と切合の関係にある。S D 2は東西に走る溝で西から東へ流下する。幅40~45cm、深さ3.5cmを測る。埋土は10YR3/4暗褐色中粒砂混じりシルトに第3層がブロック状に混入する土層である。S D 3は東西をやや斜めに走る溝で南東へ流下する。幅30~35cm、深さ6cmを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色粗粒砂混じり極細粒砂である。

これらの溝はいずれも耕作に伴うものと考えられる。溝埋土から遺物が出土していないため、所属時期は不明だが、溝のベース土となる第4 U層の出土遺物から考えて、中世期を測るものではないと推定される。

られる。第3層の下部には次の第4 U層のブロック土が混じる箇所が部分的に認められた。

第4層 弥生時代後期～古墳時代の遺物包含層。出土した遺物の主体は後期の弥生土器でごく微量の須恵器を含んでいた。また第4層上面は溝状遺構の遺構面をなす。土質の相違により次の上層(U層)と下層(L層)の2層に区分できた。

第4 U層 2.5Y3/1黒褐色粗粒砂混じりシルト。第4 L層 2.5Y3/1黒褐色粗粒砂。このうち、第4 U層では多数遺物が出土したが、第4 L層は僅少であった。

第5層 2.5Y5/6黄褐色粗粒砂～細礫。第5層上面のレベルは東から西へ緩やかに傾斜していた。当初、直前の確認調査やこれまでの調査成果のデータから

4) 出土遺物

縄文～弥生時代の遺物が出土した。縄文時代の土器は圓化できたものが1点である。弥生時代のものは17点である。

縄文土器（第5図 1）

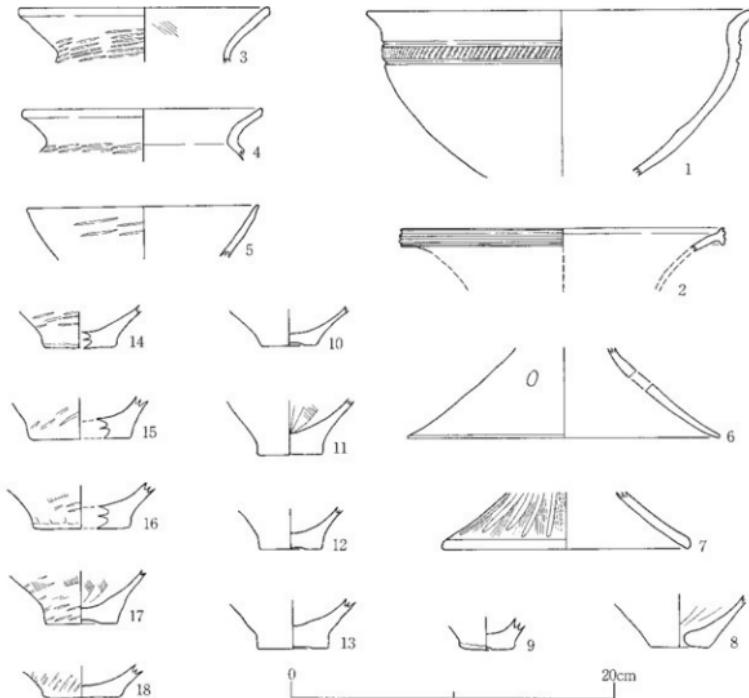
1は第5層より出土した。浅鉢である。底部を欠損するが丸底と考えられる。体部がゆるく立ち上がり、口縁部はやや強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部上半に2条の沈線を廻らし、その間に縄文を施す。風化が著しく調整法は不明である。後期のものである。生駒西麓産である。

弥生土器（第5図 2～18）

第4層より出土した。壺・甕・鉢・器台・高杯・底部の器種がある。後期のものである。

2は壺である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は上下へ摘み上げ気味に拡張する。口縁端部に3条の縦凹線文を施す。内外面はヨコナデ調整する。壺として記したが器台の可能性もある。生駒西麓産である。

3・4は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。体部外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。3は口縁部をヨコナデ調整するが外面の一部にタタキ目が残る。生駒西麓産であ



第5図 出土遺物実測図

る。

5は鉢である。体部が外上方へ伸び、口縁端部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はタタキの後、ナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産である。

6は器台である。裾部が急に立ち上がり、裾端部は丸く終わる。裾部の上部に円孔を穿つ。一部しか残っていないが本来は3孔と考えられる。風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産である。

7は高杯である。裾部が急に立ち上がり、裾端部は面を持つ。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

8～18は底部である。風化が著しく調整法の不明なものが多い。平底とやや中央が凹むものがある。14～18は外面にタタキ目が残る。8は底部中央に焼成後の円孔を穿つ。生駒西麓産である。

5) まとめ

今回の調査で検出した遺構は、中世期以降に属する溝2条にとどまった。確認調査で2層にわたる遺物包含層を確認したことからみれば、やや不明な点を残した調査になつた。確認調査で検出した土坑状遺構は、東側の調査箇所のみ見られるものと考えざるをえない。第4層の出土遺物には弥生時代後期の土器があり、從前知られているコモ田遺跡の時期に合致する。今回の調査地は遺跡範囲の西端に位置することから、先述した弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期の3時期について、生活域を移動しながら、断続的に集落を営んだことを示唆するものと考えられる。

今回の調査で大きな成果は、第5層の層中から少量ではあるが、縄文土器が確認されたことである。当初、遺構が検出されることを予想したため、第5層上面で幾度も精査を試みたが、調査地では遺構が検出されなかった。このため、計画した調査掘削深度まで徐々に掘り下げをすすめたところ、前記の土器の出土となった。図示した縄文土器浅鉢（第5図1）は、口縁部がくの字状に外反して開く器形をもつ、狭い2条の沈線間のみ文様帯としている。これらの特色からこの浅鉢は後期前半北白川上層II式の範疇に収まるものとみられる。

コモ田遺跡の周辺には、多くの縄文遺跡が点在している（第6図）。縄手遺跡は、近畿地方の後期前半期の集落を語る上で必ず組上にのぼる大遺跡である。市立縄手小学校・縄手中学校の校舎増築工事に伴い、堅穴住居址10棟をはじめ、配石遺構・炉跡などが検出されている。縄手遺跡の西に接する段上遺跡では後期土器の細片を含む貯蔵穴2基が発見されている。同一遺構面の自然河川から北白川上層I式の土器が含まれていることから、貯蔵穴は当該期の所産と考えられる。縄手遺跡と集落時期を同じくすることから、縄手遺跡に含めて考え、その居住域の下方に位置するとみなされるようになつた。船山遺跡では、第3次調査で元住吉山II式～宮殿式併行の土器が確認されている。後期後半は生駒山地西麓域で集落が極めて稀薄な時期であることが先学により指摘されており、少量ではあるが貴重な資料である。南方の馬場川遺跡は、後期前半の縄手遺跡と並んで近畿地方の晩期前半期を代表する集落跡である。集落の營造は、出土土器から後期末の宮殿式段階からとされている。このようにコモ田遺跡の周辺を微視的にみると、時期ごとの遺跡の消長がうかがわることから、今回出土した縄文土器はこの脈略のなかで捉えなければならない資料といえよう。

【主要参考文献】

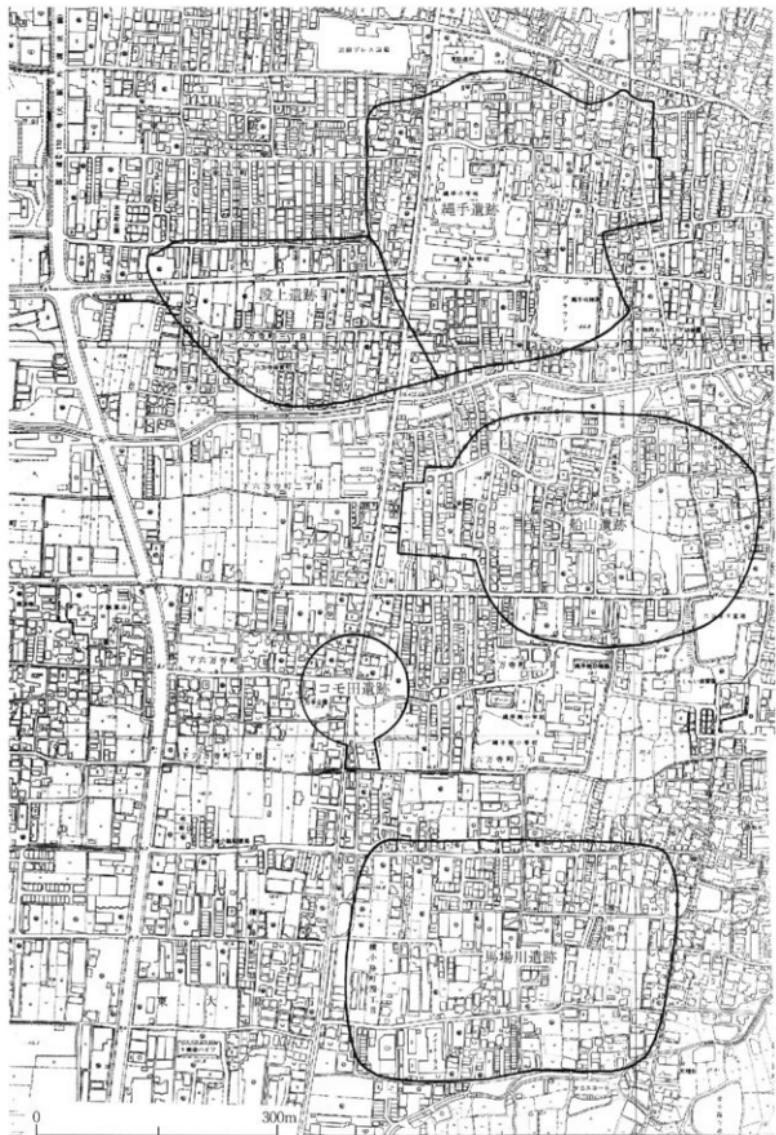
東大阪市教育委員会「縄手遺跡1・2」1971・1976年。

東大阪市教育委員会「段上遺跡第13次発掘調査報告書」2003年。

財团法人東大阪市文化財協会「船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書」2001年。

東大阪市教育委員会「馬場川遺跡I」1970年。

大野 勘「生駒山西麓域の縄文集落」（『河内古文化研究論集』所収、1997年。）



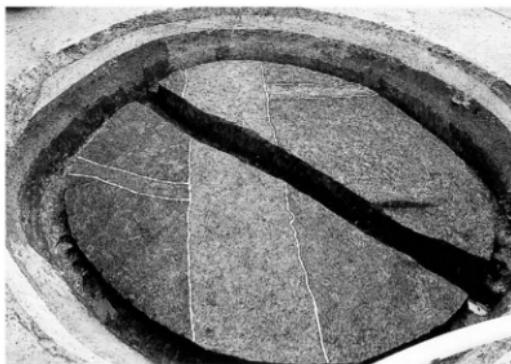
第6図 コモ田遺跡とその周辺の縄文時代遺跡

図版 1
コモ田遺跡第5次調査

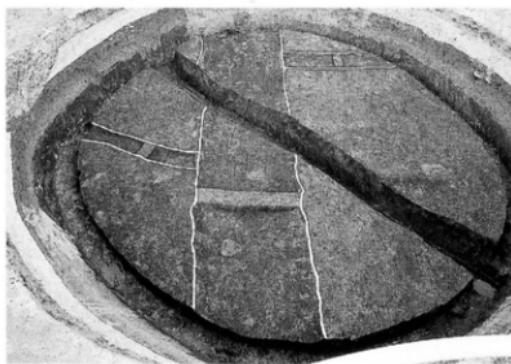


調査前の状況（東より）

遺構



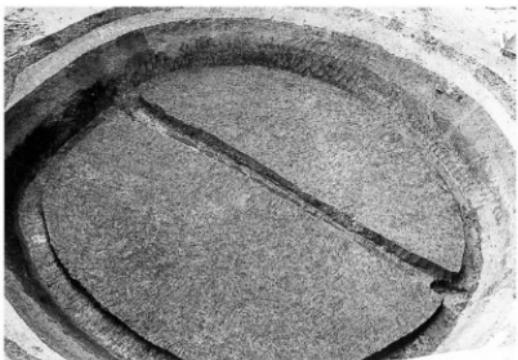
第4層上面遺構検出状況（北より）



第4層上面遺構掘削後状況（北より）



第4層掘削の状況



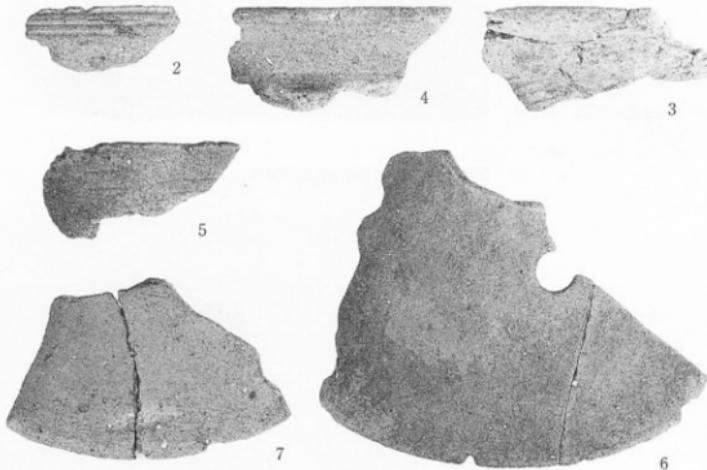
第5層上面の状況（南より）



調査地断面

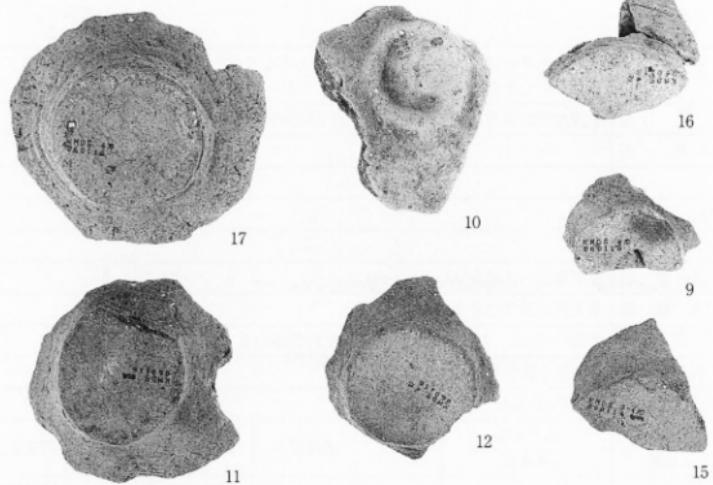


1. 第5層出土繩文土器浅鉢

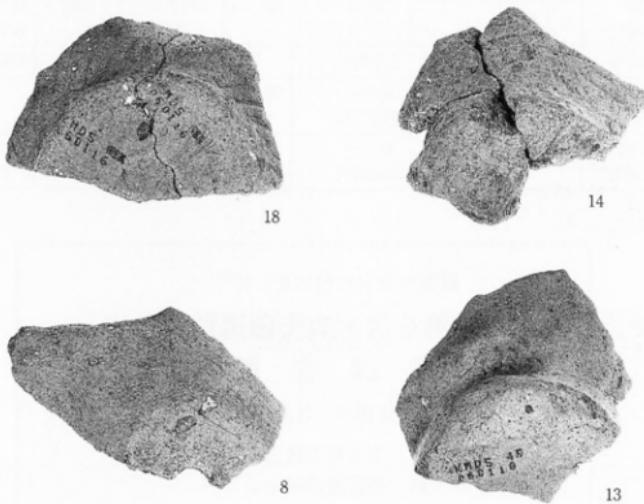


2. 第4層出土弥生土器壺・壺・鉢・器台・高杯

図版 4
口子田遺跡第5次調査
遺物



1. 第4層出土弥生土器底部



2. 第4層出土弥生土器底部

報告書抄録

ふりがな	たいしんせいほうかすいそうせっちにともなう ともいひがしいせきだい6じ・こもだいせきだい5じはくつちょうさがいよう					
書名	耐震性防火水槽設置に伴う 友井東遺跡第6次・コモ田遺跡第5次発掘調査概要					
副書名						
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	菅原章太・才原金弘					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北50番地の4 Tel06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2007年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
ともいひDFLいせき 友井東遺跡	DFLのおおきかし かなんものひう 東大阪市金物町5 ほんち 番地	27227	105	平成18年 1月12日～ 1月24日	36m ²	耐震性 防火水槽 設置工事
こもだいせき コモ田遺跡	DFLねあさかし しもろくまんじうけ 東大阪市下六万寺町 1丁目	27227	90	平成18年 1月16日～ 1月26日	20m ²	耐震性 防火水槽 設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
友井東遺跡 (第6次調査)	集落群	弥生～ 古墳時代	落ち込み状遺 構・ビット	弥生土器・土師 器・須恵器		
コモ田遺跡 (第5次調査)	集落群	縄文～ 弥生時代	溝	縄文土器・ 弥生土器	縄文土器 出土	

耐震性防火水槽設置に伴う

友井遺跡第6次・コモ田遺跡第5次

発掘調査概要

平成19年3月31日

発行所 東大阪市教育委員会
印刷 株式会社近畿印刷センター